

**Chapter 7 Second Language Writing in English (pp.100-109) by Ilona Leki**

- ライティングについて Cumming(1998)は、”Writing is text, is composing, and is social construction”と述べる。
- つまり、現在のライティング研究・指導は、視野をテキストから、過程、社会的状況に広げている。また、ライティング技能が向上すると共に他技能も向上する可能性がある。
- 知識や情報の源が文書であることや、専門分野において英語で書く技術が必要であることから、ライティングの重要性が増している。
- L2 ライティングの研究の多くは、学問的・専門的な場面に焦点をあてており、研究目標の多くは、どのように教えるのが最も効果的かについてである。
- L2 ライティングについては、良いライティングとは何か、何に対して良いのか、何が良いライティングか、どのように教えるべきか、などの疑問点がある。
- これらの疑問点に答えるために、本章では以下の要因を説明する。L2 テキストの異文化的文章形式、言語テキストの特徴の検証による、書き手のライティング技能習得過程、個人、文化背景、教育体系を含むライティング作成時の状況、評価を含むライティング教育的活動。

**1. Text and classroom-based orientations**

- 誤りの修正に関しては、ライティング研究の初期には、間違えのない作文にすることであったが、論点は、誤りを修正しないこと、また **focus-on-form** の出現により、正確さ向上のためにどのように誤りを修正するかに変化してきた。現在は誤り修正の効果は疑問視されている。
- 「文化によって修辭法の特徴が異なる」という、比較修辭法についても、L2 研究の間で注目されてきた。ジャンルの違い、状況を重視した異文化間の修辭法、階級性別などの違いによる修辭法の違いの研究もされてきた。
- 書き手に対する、読み手のコメントが最も動機づけと技術向上に影響するとして、1980年代からは、下書きを多くすることを重要とする、過程重視の手法が重視されてきた。モデルテキスト提示や誤り訂正はライティング力向上に寄与しないことが明らかとなった。読み手のコメントに関連し、誰が（教師か生徒か）どのように（筆記で、話で）応答するかにも注目が集まった。
- 結果として、ライティングへのコメントの要因は複雑であることがわかった。熟達度の高い学習者は、教師の提案でも文法レベルを超えたものには応じない、文全体の修正は好まない。生徒同士の応答は寛容すぎる、討議応答は生徒が積極的参加をすると最も効果的、自分自身で行う修正も効果的であるなど結果は様々である。効果的な応答方略について、応答とライティング力向上の関係は単純ではないことが分かった。
- 評価については、公平に測定できるライティングサンプルは何か論点となる。書き手が初めてみるトピックについて、一回きりのテストで測定、リーディングの文章を基にしたテスト、評価される前に修正する機会がある、長期にわたるポートフォリオなどサンプルの種類は様々である。
- 評価者に関しては、経験がない、L2 のライティングの問題を認識していないなどの問題点がある。トピックに関しても文化的に適切なトピックの選定なども重要である。L2 ライティングの専門家は

以下の難問へ回答をしてきた。

1. 評価するのに適切なテキストは何か？ 2. 誰が読むか？ 3. 公平な題目は何か？ 4. ライティングのテキスト評価でどのような適合が必要か？

## 2. Process-based orientations

- 書き手個人についての研究では、以下の研究結果が挙げられる。
  - ・ 流暢な書き手は、形式のみではなく、内容に焦点をあてる。
  - ・ L1 で用いるライティング過程を適用するには、最小限の L2 熟達度が必要である。
  - ・ ライティング過程は個人で異なるが、L1 から L2 へは多少異なる。
  - ・ L2 で複雑な思考をするには、L1 に思考を転換する方略が役立つ。
- L2 ライティングと SLA の共通部分に関しては、研究は少ない。主な理由は、ライティングの研究は主に L1 のライティングの研究に頼る傾向があるため、SLA はライティングよりもスピーチに焦点を当てているためである。
- SLA とライティング過程の最も重要なつながりは、アウトプットについての研究である。アウトプットするために注意が必要とされることによって、対象言語の意味理解につながり、構文化されるといふ仮説に基づく。

## 3. Orientation to contexts for writing

- ライティングの過程が明らかにされる中、個人がどのようにライティング力を向上させるかの過程に注目が集まってきた。ライティング力向上における、個人的・社会的・文化的状況、教師のゴール、ライティング時のリーディングなどタスク時の状況など、他者やタスク、ゴールの組織の中に個人をとらえている。これらの多くは質的研究であり、個人が様々な状況の中でどのようにライティング技術を向上させたか明らかにした。
- 社会政治的環境もライティング状況で重要であり、異文化間や固定観念の問題、アイデンティティーの問題があげられる。剽窃についても、西洋的思想に基づく剽窃の根源が検証された。
- 生徒の生活に負の影響がある経済・政治力を阻止するために、ライティングを用いる教授法に関しても論議がなされた。貧しい階級の子供たちに学校環境で好まれる、ライティング法を教えることに賛成の意見がある。ライティングによって、個人は自由に意見を述べ、経験や信念を変化させる連結部としてみられてきてきた。

## Conclusion

- L2 ライティングの研究は長い歴史があるが、注目されてきたのは 1990 年代からだった。歴史的に、ライティングは狭い領域の研究からより広範な個人的・社会政治的状況へと移っていった。
- 良いライティングとは何か、ライティングの指導法などの、必須の問題点にはまだ回答できていないが、理解されていたことに加えて、さらに新しい有益な情報があり、研究は発展している。